２０２３年５月の総評に代えて

○林　　桂○

●松下　誠一●（東京都　20歳）

茄子を煮る夜になっても構わない

【評】「茄子を煮る」で切れるのか、「茄子を煮る夜・・」と繋がるのかで、意味が違ってくる。後者の方が断然面白い。「夢の世に葱を作りて寂しさよ」（永田耕衣）の「夢の世」の「葱」と同じように、「茄子」と「夜」が響く。

●ビスコ●（愛知県　48歳）

不器用でみつあみの下手だった父

【評】ドラマチックに読めば、父子家庭の父のワンオペ子育ての一場面。娘のために精一杯のことをする父。しかし、なかなか標準には及ばない。当時は悲しい思いをしたのかもしれないが、今になれば父の精一杯さが見える。

●山本先生●（東京都　28歳）

竜胆の秘密を聞いてあげる役

【評】竜胆の秘密を語るのは、幼い子供だろう。「聞いてあげる役」が、子どもどうしの中で成立している可能性もあるが、大人ならば、大人の対応をしめす。「竜胆」がいい。すこし子どもには馴染みの薄い花で、秘密がいっぱいありそうだ。

●こはくいろ●（大阪府　18歳）

銀色のことばが降る街
わたしより
さみしいひとに憧れていた

【評】「わたしより/さみしいひとに憧れていた」の、若き感傷をよしと思う。

●山本　欠伸●（兵庫県　36歳）

おきなぐさの産毛を
少しだけ貰える
人になりたかった

【評】「おきなぐさ」は、赤紫のビロードのような花をつける。野草だが、その存在感は人目を惹く。群れては咲かない。ぽ

つと一株あるという感じだ。子どもの頃、見つければまず摘んだ花だ。友達が見つけて摘んだのであろう。それに対する作者の幼い思いが、いじらしくも可愛らしい。

●加藤　万結子●（愛知県　44歳）

お見舞いを禁止されてる
日曜はみんな等しく
ひとりぼっちだ

【評】入院病棟。日曜日は、医師の回診もなく、看護師の見廻りも間遠い。面会に訪れる人もない。どの患者にも訪れる空白の時間。

●香取小春●（宮崎県　30歳）

カーテンに洗濯ばさみすずなりの
造花のようなわたしの暮らし

【評】洗濯物を干すための洗濯バサミをカーテンに付けたままにして、いつでも使えるようにしておく。日常の一場面に反映する自身の暮らしぶりを突然のように理解する。

●真島しましま●（千葉県　18歳）

雨の日の化学室の机はひんやりで
蛍光ペン（青）の匂いが滲む

【評】化学室の大きな机は、白くコーティングされていた記憶がある。その冷感、吸収性がないゆえにインクを吸わずに広がる匂い。雨の日の暗さと相俟って、居心地の悪さを感じさせる。

●日下部　友奏●（群馬県　17歳）

かたつむりどうやらサンゴ礁の夢

【評】かたつむりの中には、サンゴ礁の夢が満ちている。遙か彼方、まだ海にあったころの命の記憶かまだ宿っているかもしれない。

●うろ仔●（北海道　27歳）

遠い日に祖母にもらった切手たち
祖母宛にいま舌をあてがう

【評】祖母が収集していた記念切手を、分けてもらっていたのだろう。いま、その切

手を使って、祖母への手紙を出している。昔の愛情に返信するように。「舌をあてがう」が回想の時間の余韻を感じさせる。「豊年や切手をのせて舌甘し」(秋元不死男)を想起する。